



Data

監督：安藤尋
 原作：角田光代 『月と雷』（中央公論新社刊）
 出演：初音映莉子／高良健吾／藤井武美／黒田大輔／市川由衣／村上淳／木場勝己／草刈民代

■■■ショートコメント■■■

◆チラシによれば、本作の見どころは、次の通りだ。

家族という幻想を問い直す、角田光代の傑作長編『月と雷』が映画化。心の奥深くで共鳴せずにはいられない、珠玉の人間ドラマが誕生した。

『対岸の彼女』『八日目の姉』『紙の月』など、現代女性の「人生の選択」を描いた小説の数々が絶大な支持を受けている直木賞作家・角田光代。人と出会うこと、そして人を受け入れることで、人生が予想もしない方向に転がっていく様を描いた『月と雷』は、角田文学の真骨頂と評される。この名作を、『海を感じる時』の安藤尋監督が、『人のセックスを笑うな』の脚本家・本調有香と『blue』以来のタグを組み、繊細かつ力強くスクリーンに蘇らせる。主演は『終戦のエンペラー』で華々しくハリウッドデビューした初音映莉子と、『横道世之介』『きみはいい子』などで日本を代表する若手俳優の地位を確立した高良健吾。さらに『Shall weダンス?』『終の信託』の草刈民代が、自由奔放のようであって深い孤独を漂わせる女性を演じ、新境地を見せている。

◆チラシによれば、本作のストーリーは、次の通りだ。

あたしはこれから普通の家庭を築き、まっとうな生活を重ねていく。結婚を控え、そう考えていた泰子の前に現れた、かつて半年間だけ一緒に暮らした父の愛人の息子、智。20年前、愛人・直子と智が転がり込んできたことで、泰子の家族は壊れたはずだった。根無し草のまま大人になった智は、ふたたび泰子の人生を無邪気にかき回し始める。「邪魔しないであたしの人生」、そう普通の幸せを願っているはずなのに……。

泰子は智とともに自分の母親、異父妹、そして智の母・直子を訪ねて行くことで、平板だった自分の人生が立ちどころに変わって行くのに気づき始める。

◆映画の冒頭、家の中でダンスの中の服を引っ張り出して遊んでいる男の子と女の子の姿が登場。その後、大人になった高良健吾扮する智が、スーパーのレジ係として働いてる泰

子（初音映莉子）に対して、やけになれなれしく「泰子ちゃん！」と話しかけるところから本作のストーリーが始まっていく。子供時代はあれほど無邪気に一緒に遊んでいた智と泰子だったが、今智と泰子はどんな立場に・・・？また、今2人が再開したのは、一体なぜ・・・？

さらに、今なぜ智がいとも簡単に泰子の家に住みつき、セックスまで交わしているのか、当初観客にはさっぱりわからない。しかし、ストーリー展開の中で、それぞれの家庭環境が明らかにされてくると・・・。

◆本作では、草刈民代扮する根なし草のような母親直子が不思議な存在感を放っている。この女版「フーテンの寅さん」のような行動は興味深いのが、私はイマイチ本作に見る角田光代ワールドには入っていけない。そもそも、私はこれから普通の家庭を築き、まっとうな生活を重ねていく。結婚を控え、そう考えていた泰子が、なぜあんなに簡単に突如飛び込んできた智とセックスし、あんなに簡単に妊娠し、あんなに簡単に子供を産むことになったの・・・？自分が複雑な家庭に育ち、家族とは縁遠い人間だと気づけば気づくほど、泰子は男選びに慎重になるのが当然なのでは・・・？もともと、それは私の理解が浅いだけ・・・？「月と雷」という何ともわかりにくいタイトルの意味を含めて、原作をもっと真剣に読み込めば、本作の奥深さをもっとよくわかるのかもしれないが・・・。

2017（平成29）年10月19日記